実践事例レポート 2

学校の紹介

大阪府貝塚市立第四中学校
〒597-0043
大阪府貝塚市橋本1385
TEL:072-433-1340

かつて紡績工業の集積地帯として栄えた貝塚市。現在は関西国際空港を間近に控え、交通アクセスの充実から近畿（きんき）圏のベッドタウンとしての発展を遂げつつある。新旧の住民とその暮らしが入り組む中、生徒も教師も胸を張って誇れる学校作りを目指す。生徒数595名、出原浩一（いずはら・こういち）校長。

大阪府貝塚市立第四中学校

学校を輝かせるのは〝頑張る生徒が光る〟環境作り

～学校再生に近道なし～

現在、さまざまな矛盾と困難に直面している公立中学校。わずか数年前、「荒れた学校」のレッテルをはられ、生徒も教師も苦しみの中にあった中学校が、苦闘を経て今、再生への歩みを進めている。その現場を訪ねた。

取材・西尾琢郎／撮影・土井渉（スタジオエイプル）・西尾琢郎

清掃後は速やかに集会が持たれる。部活ノートのやり取りも行われるこの集会は、部内コミュニケーションの重要な場でもある。

清掃範囲は校地内だけでなく、学校周辺にまで及ぶ。この活動が地域住民の意識にもたらす好影響は計り知れない。

清掃する仲間たちの横を登校する生徒たち。頑張る仲間の姿は、知らないうちに学校全体に染み渡っていく。

早朝からの清掃にも、喜々として励む生徒たち。押しつけではない、自分たちで選び取った活動だからこその笑顔だ。

校門を入り、目の前の校舎を見上げると目に入る垂れ幕。生徒会によるキャンペーンの呼びかけだ。

部活というエンジン

「おはようございます！」

口々にあいさつをくれる生徒たち。時間は午前7時過ぎ。ここは貝塚市立第四中学校の昇降口だ。同校では、クラブ単位の自主参加による「早朝清掃」が行われている。部活動が生活指導の重要な要素であるのは確かだが、部活動がその内容と関係なしに校内活動に直結しているのを目にするのは初めてだ。

この日はバレー部と陸上部の生徒たちが、テキパキと清掃に取りかかっていた。校舎内や中庭、校庭はもとより、校地周辺に及ぶその範囲と徹底ぶりは、まるで大掃除のようだ。

「ほんの数年前の四中は、いわゆる『荒れた学校』でした」

清掃の様子を記者と共に眺めながら、そう口を開いたのは、貝塚市教育委員会、指導主事の川﨑雅也先生だ。

「8年前、私が着任して最初に目にしたのは、あたり構わず捨てられたタバコの吸い殻でした。朝礼で校長先生が話していても私語が収まらず、集会が成り立たない状態だったんです」

窓の外では清掃を終えた生徒たちが、小走りで中庭に集まり始めていた。誰言うともなく顧問の先生の前に集合し、先生からのねぎらいに耳を傾けている。続いてノートやプリントが受け渡されると、生徒たちはそれを読みふけっている様子だ。

「あれは『部活ノート』です。4人1組で、1冊のノートを回り持ちで書き込んでいくんですよ」

ノートに記されるのは、部活中のできごとはもちろん、生徒たちの身の回りのことにも及ぶという。顧問が添削を行い、毎日の記載内容はコピーして部員全員が共有する。ノートが手元にない生徒でも何か思うところがあった日には、メモ用紙で提出する積極派も珍しくない。

清掃活動もそうだが、こうして日々の体験や思いを形にし、共有する取り組みが部活動に根ざして行われている貝塚四中。クラブが主役の早朝清掃は、強い印象を私たちに与えた。

ずっと、頑張る生徒たちがいた

早朝清掃が終わり、一般生徒も登校すると、普段は朝読書の時間となる。しかし中間試験1週間前のこの時期は、「ここが出るぞ問題集」を使った自主学習の時間だ。そして自宅での勉強と、ここでの学習とを記した「自主学習ノート」を提出（むろん強制にあらず）して完了。

この日1時間目の総合的な学習の時間は、全校集会にあてられた。冒頭、校長先生は、前日に行われた地域団体『泉州掃除に学ぶ会』による校内のトイレ清掃活動について話した。

始業前の時間には、通常、読書活動が行われているが、取材時は中間試験1週間前ということで、自主学習が行われていた。使われている教材は、学力向上委員会の手による「ここが出るぞ問題集」だ。

自宅での学習や朝の自主学習の成果は「自主学習ノート」に記載の上、提出する。学級ごとの提出率を競う「自主学コンクール」も生徒のやる気を引き出す要素の一つだ。

先生の紹介

参河志保（みかわしほ）先生

2年5組担任。人権教育担当としても活躍中。新規採用で四中に配属以来、くじけずめげず前向きな取り組みを続けてきた。関西人のイメージに違わぬ軽妙なトークで進める授業は、生徒たちにも「おもろい」と好評だ。

先生の紹介

古谷直之（ふるやなおゆき）先生

鳥居先生の先輩として生徒会指導にあたる古谷先生。5年前の着任当時すでに24名の大所帯だったという生徒会執行部だが、その後、多くの一般生徒がその活動に共鳴し、支えるムードと仕組みが作られてきたという。

先生の紹介

鳥居清一郎（とりいせいいちろう）先生

新規採用で四中に配属以来、生徒会活動を担当してきた若手先生。学校行事のみならず、部活動や道徳などの授業、さらに校外でのボランティア活動と縦横に連携する組織作りをサポートしている。

先生の紹介

川﨑雅也（かわさきまさや）先生

8年前に四中に赴任するや、部活動・生徒指導などを縦横に結びつけ、体当たりで四中再生の方途を示した。現在は教育委員会の指導主事としてその体験を市全体に展開。そして引き続き四中を見守っている。

先生の紹介

出原浩一（いずはらこういち）校長先生

当初は「あたりまえの学校」を目指してスタートした四中再生。それを今「誇れる学校」へ向けて、さらに押し進めていく先頭に立つ出原校長。生徒たちに送り続けるまなざしとエールは、あたたかな思いに満ちている。

「四中のトイレはいつもきれいにされていますね、とお褒めの言葉をいただきました」という校長先生の話に、納得の表情を浮かべる生徒も。早朝清掃の様子を見た後だけに、生徒たちの自負のほどが感じられる。

表彰状の授与等に続いて、集会の主役は生徒会にバトンタッチ。司会進行を担当する生徒会役員が会場前方に立つと、校長先生のときにも増してしんと静まる生徒たち。

四中生徒会執行部は、なんと24人に上る大所帯だ。うち2・3年生の執行委員は、前年度末の卒業式直後に行われる選挙で決定済み。その新執行部が立てた年間計画に沿って、今後1年の活動が進められる。この日の集会では、新1年生の執行委員と、各種委員会の認証式が行われた。

全校生徒が見守る中、校長先生から認証状を受け取る生徒たちの上気した表情が、晴れがましさと責任感とを物語っているかのようだ。

これほど大所帯の執行部が作られたのも、荒れていたというかつての四中を立て直す方策だったのだろうか。生徒会担当の古谷先生に尋ねてみた。

「いいえ。荒れていたその当時すでに、生徒会は24人構成だったんです。もちろんそれは、学校を生徒たち自身の力で良くしていってほしいという願いからだったと思います。けれど24人にしたから良くなった、というものではなかったんですね」

同じく生徒会担当の鳥居先生は、さらにこう続けた。

「どんな学校でも、周囲に左右されずにまじめに頑張る生徒と、やんちゃがなかなか止まらない生徒がいます。ですが大多数の生徒は、そのどちらでもないんです。学校の雰囲気次第で、これ多くの生徒たちが学校を良くする側につくか、その逆につくかが決まってしまうんですよ」

荒れ放題に見えたかつての四中でも、頑張る生徒は常に頑張り続けていた。そんな生徒たちを孤立させてはいけない。頑張りが報われる学校にしなくてはいけない。そんな思いが先生たちを突き動かし、やがて生徒たちと一つのうねりを生んでいったのだ。

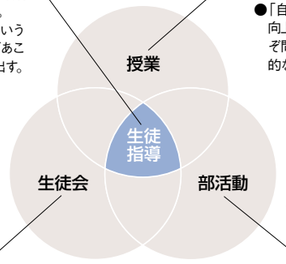
この日の全校集会では、新1年生の生徒会役員「認証式」が行われた。全校生徒の前で「認証」されることの重みが、その表情を引き締める。

できることから。できること全部を。

全校集会では、生徒会の主催で展開される〝キャンペーン〟の周知を狙った劇が演じられた。4月に実施された「スタートキャンペーン」に続き、5月は「さあやるぞキャンペーン」。五月病にかかったかのようにうなだれて机にうつぶせる主役の男子生徒が、仲間の呼びかけで元気を取り戻し、目前に迫った中間テストの準備に取りかかるという筋立て。たったこれだけのストーリーながら、軽妙なステップでやる気の回復を表現した主役、声をそろえて主役に呼びかける仲間たち役の熱演に、場内は拍手喝采だ。

生徒会執行部による「キャンペーン劇」。5月実施の「さあやるぞキャンペーン」は、中間テストに向けて勉強を頑張ろうという呼びかけだ。コミカルな中にも真剣な劇に見入る生徒たちの表情が印象的。

学校再生「全部やるぞパズル」



●授業で、部活動で、生徒会で頑張る生徒を「光らせる」指導。
●全校集会での表彰や認証という「晴れ舞台」を見て下級生があこがれるという好循環を生み出す。

●24人の執行部を中心に、学級代表、各種委員で構成。年間14ものキャンペーンを立案・実施する。
●惰性で活動を行わないよう、毎年その意義・内容について検討し見直しを重ねている。

●道徳（人権教育を含む）を柱にした全校協力態勢の構築。
●「自主学コンテスト」や、学力向上委員会による「ここが出るぞ問題集」などを通じた、自発的な学びの姿勢作り。

●“本気”の部活動を前提に、早朝清掃やボランティアへの参加の足場となる。
●地域社会への働きかけと、そこからのフィードバック（叱咤激励！）。

先生の紹介

大前慶幸（おおまえよしゆき）先生

子ども支援コーディネーターとして、道徳・人権教育を含む生徒指導全般をサポート。小中連携の実施にあたってもその中心となって活躍する、頼れるベテラン先生だ。

先生の紹介

稲葉佳布（いなばかのぶ）先生

1年3組担任。道徳を担当する。「『佳きこと』を『公布する』という私の名前は、教師にピッタリでしょう？」と笑う。厳しくも優しいママさん先生だ。

たち役の熱演に、場内は拍手喝采だ。

部活とそれを土台にした清掃、ノート活動。自主学習に生徒会キャンペーン。早朝からの数時間で、早くも記者の頭はパンク寸前に。その整理を兼ね、この後の授業取材に先立って校長先生からお話を伺うことにした。

「どこから手を着ける、という順序を考えるゆとりはありませんでした。学校を少しでもいい方向に向けるためになると思うことなら、迷わずすべて手掛けてきたように思いますね」と語る校長先生。なるほど、この日見てきた数々の取り組みが強い一体感を持って迫ってきたのは、それらが順次にではなく、まさに一丸となって進められてきたからなのかもしれない。

「生徒会の子どもたちも、先生方も、みんな苦しんでいたんです。必死でした。とにかく動かなくては変わらない。ですから誰かが、何かをやるというだけでなく、自然と横のつながりが生まれ、それぞれの取り組みが連携していく形が生まれたのではないでしょうか」川﨑先生もそう続けた。

生徒たちが過ごす毎日は、いっときもゆるがせにできない大切な時間だ。拙速とは違う、今その時を惜しむ思いが可能にしたのが四中の「できることから全部やる」という取り組みの姿なのではないだろうか。

道徳を軸に進める生活&授業改善

校長室でのお話をかみしめながら、授業取材へと向かう。訪ねた1年生の教室では、道徳の時間が始まっていた。

校長先生、川﨑先生が口をそろえて指摘したのが道徳の重要性。生徒会や部活動をてこに高めた学校再生への機運を本当のものにできるかどうかは、結局、学校の本分である授業をしっかりと立て直せるかにかかっている。授業のあり方と生活指導の両面に渡ってカギとなるのが道徳なのだという。

入学から間もない1年生にとって、小学校での道徳とは違った意味合いが込められたこの授業。指導にあたる稲葉先生は、教材を丹念に読み進めながら、生徒たちの思いを引き付けていく。教材のテーマを「人ごと」から「我が事」へと導く指導が見事だ。

続いて移動した2年生・参河学級の教室でも、同じ教材を使った道徳の授業が行われていた。学年・学級なりの違いはあれ、板書や授業の進め方にも共通点が多い。実はこれが四中の道徳指導の特徴だ。学校全体での数年間に及ぶ道徳研究の蓄積があり、教材や指導案のアーカイブがあることによって、授業研究がしやすくなり、授業力もアップしてきている。また、教材や指導案は、生徒会キャンペーンや各種行事との連携を視野に入れ、全学年協力の下に決定されているという（共通教材を使うのは35コマ中15コマ）。

「いじめ等、学校で起きる問題の根本は、

小学校とは一味違う道徳の授業に取り組む1年生。稲葉先生の巧みな範読が生徒たちをテーマに引き込んでいく。

2年生の道徳でも1年生と同じ教材を使用。しかしこちらは生徒自身がそれを読み込み、テーマに迫るという深みがある。

生徒たち自身による数々の掲示物も印象的。生徒会キャンペーン周知ポスターをはじめ、どれも色彩にあふれ、仲間への思いがこもった呼びかけに満ちている。定期試験の出題ポイントをまとめた壁新聞は、生徒自らが教科担当に取材したもの。メモに書き留める生徒の姿も見られる。

多くの場合『正しい知識がない』ということにあります。〝知らない〟ことが無用の差別を生んだり、相手の気持ちを思いやる力を弱めてしまったりするんです。知るべきことを知った上で一人ひとりが自分で考えるという習慣づけに、道徳の役割はとても大きいと思っています」と道徳担当の稲葉先生。

ここ泉南地域は、人権教育に力を注いできたことでも知られているが、四中では道徳指導の充実拡大に伴って、人権教育には別途担当をあてている。それが参河先生だ。

「道徳では、教材を通じて生徒それぞれが感じることを大切にしていますが、人権教育ではより直接的に『いけないことはいけない』と伝えることを目指しています。性別や出自などを理由にした差別は、絶対に許してはいけないというのがその中心です」と参河先生は話す。

〝あたりまえの学校〟から〝胸を張れる学校〟へ

「アカンことをアカンとハッキリ示し、その線引きをブラさないことが大切です。場当たり的に許したり、しかったりという判断は、生徒の不信を招くからです。ここ数年間の取り組みには本当に多くの要素がありますが、全部を貫いてきたのはこの点だと思いますね」

こう話すのは、子ども支援コーディネーターを務める大前先生だ。「アカンものはアカン」を実際の中学校で貫くことの困難さを思いつつ、思い起こされたのは早朝清掃の光景だった。

校地内だけでなく近隣まで及ぶ清掃などを通じて、地域社会が四中を見る目は少しずつ確実に変わってきた。同時に、大人たちから感謝の言葉をかけられるという体験は、生徒たち自身をも変えてきたに違いない。

「アカン」という禁止は、「頑張り」が認められるという肯定によって裏打ちされ、生徒の内に根ざすことができる。

仲間と力を合わせて学校をよくする。勉学に励んで自分を高める。そんな頑張りに向かってまっすぐ励むことのできる環境が、部活、生徒会、そして授業のそれぞれで、しかし連携しながら生み出されてきたのだ。

そして残るカギは「学外連携」にあった。その一つが小中間の連携だ。

中学校側では『どうして小学校で生活態度を身に付けさせておけないんだ』と思い、小学校側では『どうして問題のなかった子が中学であんなふうになってしまうんだ』といぶかしむ。荒れた学校と呼ばれたころは、小中互いに責任を押しつけ合うムードがあったという。しかし、小中間での人事・情報交流が進められ、現在では互いの実情や課題を認識できるようになった。

「私たちも小学校に出前授業に出掛けたり、小学校の先生がこちらの授業を見に来たり、生の交流ができるようになりました。互いの取り組みを意識して指導にあたるようになったのは大きいですね」と参河先生。これは大阪府ぐるみで推進されている「小・中学校間いきいきスクール」の取り組みが生かされている好例と言えそうだ。

学外連携その2は、地域社会との連携だ。早朝清掃を通じた近隣住民へのアピールもその一つだが、さらに各種のボランティア活動が、四中と地域との結びつきを強めている点は見逃せない。高齢者施設や障害者施設、学童保育所などへ積極的に出掛け、その活動を手伝うといった取り組みにも生徒自身が積極的に関わるようになった。期待され、それに応え、感謝されるという体験が好循環につながっている。

「自主と放任とは違います。おさえるべきところは、しっかり教師がおさえる。その上で、お仕着せではなく生徒自身がルールや取り組みについて考えることを尊重します。それが責任の自覚につながり、主体的に勉学やスポーツ、ボランティアに取り組む力を生むのです」

「私たちはそんな生徒たちに『頼むぞ』『よくやった』という声をかけ続けていきたいと思っています」

校長先生、川﨑先生はこの日のインタビューをそんな言葉で締めくくってくれた。四中の歩みは、とどまることなくこれからも続いていく。 J.

これも1年生にとっては初体験となる中間テストに備えた、放課後の補習。「ここが出るぞ問題集」を活用しつつ、先生が指導にあたる。

2年生3年生の補習は、友達同士の教え合いを含む自主学習が中心。先生は生徒の求めに応じてアドバイスにあたっている。